

元木 靖 著

『南インドの景観地誌－交錯する伝統と近代』

海青社 2022年2月 203頁 3,800円＋税

地域調査をしてレポート・論文を書くのが地理学徒の本業である。しかし現地に入り、見ることは誰にでもできるが、観て、聴いて、書くこととはたやすいことではない。現地在海外となると苦労は倍増する。この度、その模範となる研究、すなわち現地に入り景観を観察し、そこに住む人々の生活史を記述するといった研究が、南インドを対象として元木靖氏らによって2010年代に行われ、その成果が上梓された。

その内容は、元木氏の言葉でいえば「景観地誌」研究であり、観察・記述する際に対象地域の歴史的考察を忘れてはならない、という氏の思いが、副題の「交錯する伝統と近代」に表われている。

以下、著者の出版意図を確認したあと、本書の9章からなる構成に従って、各章の簡単な紹介をしていきたい。そして、付け加えになるが、本書に刺激されて思い出した1984年夏の評者の南インド体験談を記しておきたい。

- 第1章 インドの北と南—南インドの位置づけ—
- 第2章 南インドを捉える—宗教と河川—
- 第3章 南インドのヒンドゥー寺院—その景観と役割—
- 第4章 南インドにおける近年の社会変化の諸相—カーヴェリ川流域—
- 第5章 土地利用からみた農業変化の現況—基幹作物の盛衰—
- 第6章 生活様式の伝統と変化の傾向—衣・食・住—
- 第7章 交通の現状と地域変容への胎動—高速道路の整備—
- 第8章 コーラム画の伝統と存続—南インドの精神—
- 第9章 結語に代えて—東アジアへの教訓—

序章で、インドが1990年ごろから目覚ましい経済発展を遂げたことをあげ、その変化を捉えるためにも、多様性を考える際にも、個々の事象をどのように認識するかが重要で、諸事例を比較検討する中で、その集合として全体性を理解する視

点に立っている。

第1章では、インドを単純に南・北にわけて地域差を論ずるのではなく、海岸部と内陸部、あるいは都市と農村に分けて考えた方がよからう、との考えで、南インドが概観されている。

降水量に関して、西部のアラビア海沿いは年間降水量が3,000mmを超えるのに、西ガーツ山脈を越えた内陸側は1,000mm以下の所が多く、冬季の北東からのモンスーンで若干雨量が多くなっているのが南東部海岸沿いであるが、そこでも日本と同じくらいの1,000~2,000mmである。

対外交渉に関して、ポルトガルのヴァスコ・ダ・ガマが1498年に南インド南西部のカリカットに上陸してインド航路を発見したことは良く知られているが、その後も南インド社会は歴史的には海を通した対外交渉の役割が重要な意味を持っていたことに目を向けられている。注記で、言語学の立場から南インドのタミル語と日本語の対応が30例ほどあるとの紹介があり、日本人にとって南インドとの距離が一挙に縮まった感じがした。ハタケ、タンポ、コメ、そしてハカ(墓)までも。

都市・農村に関して、IT関連の工業団地や都市化から取り残された農村では伝統的な自給自足の分業体制であり、その経済活動の多くはローカルな空間で閉じている。

2章から4章まで、南インドを「宗教と河川」の関係で3つの章を設けて議論されている点が本書の特徴であり、ヒンドゥー教の世界が河川と共にわかりやすく解説されている。

インドで河川と言えば北インドを西から東に流れるガンジス川(ガンガー)で、随所にヒンドゥー教の聖地が点在し、人は川で神に祈り沐浴する。南インドでガンガーに匹敵するのが西ガーツ山脈からベンガル湾にそそぐカーヴェリ川で、その流域の社会変化がフィールドワークされている。

第2章の「南インドを捉える—宗教と河川—」で、ヒンドゥー教が神聖視する河川との関係が南インドでどのように展開してきたのかが、検討されている。ヒンドゥー教を、インド文明における様々な教義や習俗および人間的な生き方などを総合したものであると評価し、ヒンドゥー教寺院がカーヴェリ川に沿って多数分布している図が示さ

れ、そこで、神々が人間と一緒に暮らしている南インドの姿がみられると述べられている。

そしてヒンドゥー教寺院を訪ねて、その景観と役割が第3章で記されている。インドを語る際に「多様性」という言葉がよく使われるが、それがヒンドゥー教の寺院にかぎってもよくわかる、というのが第3章である。

著者が注目した、祈りの場だけでなく、様々な役割を3点あげておこう。①地域のシンボルとしての役割、②遠方まで展望でき、絶好の教育的・観光的価値を有している。③宗教関連の施設の多くが極彩色の目立ったものが多く、自然界のさまざまな動物および神々が人間と一緒に暮らしている姿がはっきり表現されている。こうした役割の中で、「寺院は階級の異なる巡礼者たちのために、自由な交流の空間を提供している」(50頁)との指摘から、カースト制度で上下の身分差が厳格な中で、対立しつつも共存していく社会を作り上げていく役割を寺院が担っているのだと知らされた。

第4章では、南インドにおける近年の社会変化の諸相を、カーヴェリ川流域全体を対象として考察されているのが特徴で、次の3つの観点からなされている。①人間活動の基礎条件としての自然環境、②インドの社会を特徴づける宗教(とくにヒンドゥー教)、③人口と経済活動。

宗教に関しては第3章で詳論されているので割愛されているが、カーヴェリ川の上流部のカルナータカ州と下流部のタミルナドゥ州の人口が、1951年の独立から60年後の2011年に、前者では1,900万人余から6,100万人に、後者では3,000万人余から7,200万人余と急増している。これだけ人口増がみられると、農地確保のために灌漑用水が必要になってくる。その開発努力が緑の革命による井戸をはじめとして、ダム・貯水池・用水路の造成などの水利開発事業の展開が上～下流の地形、降水量、農業的土地利用の違いとあわせて言及されている。

第5章の「土地利用からみた農業変化の現状」では2009年から2013年にかけて、北東部のアンドラプラデシュ州を除いた南インドの全域を5コースに分けて各1週間の日程で調査された詳細が報告されている。商品作物として桑・バナナ・ウコン、雑穀栽培としてラギ(シコクビエ)、そ

して水稲に関しては田植え、脱穀、収穫後の放牧などについて詳細に記述されている。

その記述の仕方であるが、われわれが地理の論文で慣れ親しんできた作物の生産量を国別、州別など行政単位別に表にして比較するといった方法はとらず、誰がどこでどのように土地を利用し生産し消費・販売しているかという、著者の言葉によれば「景観」描写に徹している点が特色となっている。

農業変化の現状が、例えば、養蚕技術の進歩と市場におけるシルク価格の高騰により、サトウキビ栽培や稲作から桑園に切り替える傾向が見られた。用水を有効利用するためにバナナと水田稲作を3年ごとのローテーションで収益を高める経営をするようになった。等々が聞き取りによって明らかにされている。

第6章では衣・食・住について、生活様式の伝統と変化の傾向が、多数の写真を添えて語られている。衣・食・住のどれをとっても「これが南インド特です」と言えない多様性が示されている。「住」に多くの頁数が割かれているが、衣・食についても興味深い写真が載せられている。以下、写真のタイトルを転記しておくので著者の着眼点を読み取っていただきたい。

住①「農村家屋にみる草葺き屋根と赤瓦の屋根」、住②「土地なし労働者の住宅」、住③「草葺き屋根の住宅と劣悪な土地環境」、住④「貧困地区(低カースト)の床屋」、住⑤「津波被害を受けた農漁民の移転集落」、住⑥「カーヴェリ川下流デルタ・水田地帯の農家」、住⑦「内陸・乾燥畑作地帯の農家」、住⑧「中庭を有する富裕農家」、住⑨「丘陵地における新・旧住宅の景観」、住⑩「団地風の赤瓦の住宅街」、住⑪「個性的な新・改築住宅が目立つ農村」、住⑫「豊かな集落に隣接する貧困層の住宅」、住⑬「山地の斜面に出現した個性的な住宅群」、住⑭「教会の立地が周辺住宅に及ぼす影響」、衣①「家庭における男女の衣装の比較」、衣②「外出着と仕事着」、衣③「学生の衣装」、衣④「屋(野)外での洗濯」、衣⑤「洗濯カーストの人たち」、衣⑥「沐浴と衣装の乾燥」、食①「ホテル/レストラン(朝食)」、食②「バナナの葉に盛られたカレー料理、カレーを盛り付ける様々な器」、食③「カレー食の風景」、食④「伝統的な調理の現場」。

これらについて写真付きで紹介したいところだが、頁数を取りすぎて無理なので、評者のメモ書きを2, 3示しておこう。

「住」について、富裕層から貧困層まであらゆる家屋が示されているが、南インドは冬季もあたたかい。路上を家とする生活者もいたのではなからうか。「衣」について、バラモンであろうがハリジャン（不可触民）であろうが皆サリー。「住」に差があっても差別のない「衣」のサリーは素晴らしい。「食」について、食器がバナナの葉っぱとは！ 1人1回使い捨て、捨てた葉っぱは家畜や鳥のえさになる。清潔で環境にやさしいバナナの葉っぱ。

次に、第7章では、「交通とは人や物・財貨や思想が空間的に移動すること、あるいは社会生活上で障害となる空間的距離を克服することである」と定義され、高速道路の整備に焦点をあて、南インドの地域変容が語られている。

産業革命以後、商業や工業が交通の推進者となり、第二次世界大戦後は交通技術の発展により、歴史上これまではなかったような環境変化が急速に生じ、古来の生業を基礎とした社会が解放され、工業や都市を中心に経済発展を志向するようになった、と交通史を振り返っている。そのベとして、こうした変化の中で、「近代化」は必ずしも「善」を意味するものではなく、過去のものより悪いものも数多くある、と傾聴に値する指摘がなされている。グローバル化の中での地球環境問題などがそうであり、リージョナルな地域変化を見据えていくことが重要であるとの考えで、自動車を中心とした道路交通が注目され、本章で、南インド交通史研究がなされている。第1期、紀元前、初の統一国家マウリヤ王朝時代、アショカ王が全インドに多数の公路を建設し、駅停を設け、並木を植えた。第2期、18世紀以降のイギリス植民地時代、鉄道建設が大きな役割を果たした。第3期、自動車の時代となり道路整備が進められた。そして南インドの交通現象の実態が農村と都市に分けて述べられている。

さて、南インドの実証研究の最後として、第8章で「コーラム画の伝統と存続」が「南インドの精神」との副題を付けて述べられている。

コーラムとは「女性が住宅の入り口に米の粉で描き飾る複雑な幾何学模様」であり、元木氏は

「コーラムは地域に生きる人びとの精神風土を示す指標として重要であり、経済発展に伴う社会変容の意味を探るうえでも今日的な研究の意義がある」と主張され、伝統性の強い農村、都市化前線（農村）、都市内の住宅地のいずれにおいても、図柄に違いこそあれ、地面に描かれている写真を載せられている。本書の最後にコーラムが載せられていた理由について、著者の「コーラムは古くから伝わってきた風習の遺物ではなく、現代の社会変容に対応して存続しており、ここに南インドの地域の精神を読み取ることが出来る」との思いを知り、理解できた。

最終章の第9章「結語に代えて」では副題に「東アジアへの教訓」とあり、われわれ日本人も傾聴せねばならない章になっている。筆者は冒頭で「今日の南インドには、これまでの欧米や日本・中国が目指してきた「進歩」(変容)の方向とは異なった姿が現れているのではないかと提言し、本論で①経済と宗教に関する欧米史観、②近年の経済と宗教(ヒンドゥー教)の関係、③日本および東アジアへの教訓、と題する3つの観点から考察が加えられている。

厳格で排他的な出生重視の宗教としてヒンドゥー教を捉えるのではなく、多様なインド社会において人々の精神生活に欠かせない、いわば「環境知」(思想)とでもいうべき総合的世界観を有する教育装置としてとらえるべき、と評価している。神々と人間が共存し、自然を重視した環境知を日常生活上で活かすようにとの著者の思いが伝わってくる。

以上、本書の内容をおおまかに紹介したが、冒頭で触れた地理学徒の論文書きについて、いかに進めたらいいのか。

いきなり南インド論を述べよ、グローバル経済への変化を述べよ、との課題を与えられても、誰しも二の足を踏まざるを得ないが、「よりミクロな個別事象に即して理解する作業が大切」(30頁)との指摘に勇気づけられた書物であった。

以下、本書に刺激されて思い出した評者の1984年夏の初南インド紀行の強烈場面を挙げておきたい。8月3日、アーメダバードからボンベイ(現ムンバイ)に飛んだ。本書に記されているように、西ガーツ山脈のアラビア海沿いの地域は世界的な多雨地帯である。そのとおり雨だった。海岸

沿いのホテルを予約したのだが、満杯で地下の作業員の隣部屋なら、ということで、それに甘んじざるを得なかった。というのはサウジアラビアからの団体が1フロア全室を借り切っているからとのことだった。サウジの方に旅行目的を聞いてみたら「雨にうたれたい」だった。海岸沿いの道路をみたら黒いベール姿の女性も傘なしで歩いておられた。

8月9日、東海岸のマドラス（現チェンナイ）からタンジョールまでタミルナドゥ州の水田地帯を列車で9時間の移動をした。日本なら稲穂が垂れ下がらんとしている時期なのだが、そこで最初に目に映ったのは女性が横一列になって田植えをしている光景であった。8月に田植えかと思った1分後に、今度は稲刈りをしていた。さらに耕耘、種まきもすぐ近くの田んぼで行われていた。考えてみれば夏季と冬季に雨が降り、井戸もあり、灌漑用水も整備されている。1年中がhot, hotter, hottestといわれるくらい熱い南インドでは、稲作は4・5月の乾燥した猛暑期を除けば1年のうち、いつ始めてもいいわけである。3期作もできるのだ、と納得できた。綿摘みも行われていたし、大麻畑も広がっていた。ボンベイで大麻売りに付きまといわれただけに、気をつけねばと思った。

南インドの「食」についても、前述のパナナの葉っぱ以外に、驚きが多かった。タミル大学の食堂で、昼食時のカレーがあまりにも辛かったので、チャイを所望したが、食後にチャイを飲む習慣はありませんと断られてしまった。水は出されていたが腹痛のもとになるので飲むことが出来ず、駆け足で大学を出て町の茶店に駆け込んだ。

また、某ホテルの食堂で、お客さん皆がコー

ヒーを飲んでいて。その飲み方が、コップからではなく、皿にコーヒーそそぎ、口を当ててすすっていた。皆猫舌なんではないか。この辺りではチャイよりコーヒーですと言われて、意外であったが、翌日バスでデカン高原に登ってみたら、一面コーヒー畑だったので、納得した。

最後に、牛について。牛は、本書でも紹介されているように、シバ神をはじめとした神々と並んで、多くの寺院で牛像が祀られ、住民の心のよりどころとなっている。女性が牛糞をこねてピザの形に作り、住宅の壁に貼り付けているのはよく見かけたが、でも、こんなことまでするのか、と驚いたのは、デカン高原の麓の定期市に出かけた際、牛市の業者が、牛がおしっこを出した瞬間、両手で受け止め、そのお水、いや聖水を自分の体に振りかけたのでした。

こうした思い出が次から次へと出てくるのは、来年になったら3か月間南インドに入り定期市調査をするのだと、楽しみながら予備調査をしたものの、実現できなかった悔しさがあったからである。帰国後、インディラ・ガンジー首相が10月31日に暗殺された、との訃報が入った。混沌に陥るインド政府は、海外からの調査隊は拒否するとの通達を出し、われわれ、石原潤先生を隊長とする南アジア定期市調査隊もそれに従わざるを得なかった。

私自身その3年後から、北インドへは何回も出かけることができたものの、南インドへは行く機会を逸したままになっていた。こうした状況にあって、本書に巡り合い、私の代わりに調査してくださったのだな、私もこんな調査がしたかったな、と嬉しく書評させていただいた。

(溝口常俊)